

## 社会的企業サンダーランド 訪問記 (2)

中川雄一郎 (明治大学 / 協同総研)

### VRCPS のミッション・ステートメント

既に述べたように(『協同の発見』No.146)、「コミュニティの再生」を目指して社会的企業サンダーランド(SES)によって取組まれた最大のプロジェクトが「ヴァリー・ロード・コミュニティ・プライマリィ小学校」(VRCPS)の設立であった。そのVRCPSを私と研究仲間は(校舎建設中であった2002年の訪問を別にして)開校後の2003年と翌年の04年の2度訪問した。04年の訪問の際には残念ながらクリスティーン・ヤング校長の調整努力にもかかわらず、結局彼女にはお会いすることが叶わなかった。とはいえ、ヤング校長から「中川教授たち訪問者への親切な対応」を託されていたジョージ・スタバート(コミュニティ担当)副校長がVRCPSのこの1年間の変化・前進を説明してくれた。だが彼の説明を紹介する前に、本誌146号で述べておいたように、03年のわれわれとのインタビューでヤング校長がVRCPSについて語ってくれた内容を紹介しておかなければならない。

しかしその前に、われわれとしては何よりもまず、児童・生徒365名、教職員スタッフ69名を擁するVRCPSが「サンダーランド市立小学校」でもサンダーランドの貧しいヘン

ドン地区のコミュニティに設立された「私立小学校」でもない、ということをしっかり認識しておく必要がある。この認識はVRCPSの「ミッション・ステートメント」と「趣意書」それにヤング校長のインタビューを正確に理解しようとする際に非常に重要となる。

VRCPSが「コミュニティ立小学校」であることを次の3点が証明してくれている。第1に、VRCPSの設立プロジェクトはSESが指導したこと、第2に、その設立資金約11億円はEU(ヨーロッパ連合)のESF(ヨーロッパ社会基金)によるものであること、そして第3に、ヤング校長先生はSESのジェフ・ドッズ氏をはじめ「コミュニティの再生」プロジェクトやプログラムに関わった他の組織やコミュニティの代表によって94名の応募者のなかから選ばれた校長先生である、ということである。ドッズ氏から伺ったことであるが、この第3の理由は、ドッズ氏やコミュニティの代表にとっては相当に重要な理由であったそうである。その意味で、彼女の専門教育(障害児教育)とその実践の教育歴、一時期教職を離れて故郷でレストランを成功裡に経営した事業歴、そして再び請われて障害児教育に携わりつつ校長職を遂行した教育指導者歴など、彼女が

VRCPSにやって来るまでの彼女のすべての活動・実践・思想・哲学・エトス・パトスが、すなわち彼女の社会的な人間関係と価値観が貧しいヘンドン地区の「コミュニティの再生」を目指す「VRCPSの校長」にもっとも相応しい、とされたと言うべきかもしれない。他の教職員の採用も基本的にはヤング校長の事例と変わるところがない。このことは、VRCPSが「市立」や「私立」の小学校ではなく、それらとは異なるカテゴリーの小学校であることを示唆している。VRCPSは文字通りの「コミュニティ立小学校」なのである。

こうして、VRCPSは、「コミュニティ立小学校」であることから、「コミュニティの再生」を目指す教育実践をソーシャル・ミッションとして掲げるのである。VRCPSの「ミッション・ステートメント」は次のように気高き目標を宣言している。

私たちの目的は、誰もが学習と社会生活のすべての面で成功を体験する学校を創造することである。私たちは、新規な事柄に挑戦し、また教室内での勉強と学習および放課後クラスからスポーツ、音楽芸術活動、行動の改善それに社会的成功に至るまで、学校でできるあらゆる物事に「挑む」心構えをもつよう、子供も大人も同じように励まし、鼓舞する明確なルールと将来の希望を掲げて、思いやりのある、落ち着いた環境を創りだしていく。最新のコンピュータの技術と装置をもち、多数の専門スタッフを擁し、いくつかのユニークなデザインのコミュニティ施設を整えている私たちの新しい校舎は、このような目標のすべてを支えている

のである。新しさ、特別それに多様といった言葉も、もし私たちの学校の子供たちがさまざまなニーズと関心をもつ個人であると認識されないのであれば、何の意味もないのである。私たちの出発点は「各人は一人ひとり異なっている」というものである。

見られるように、このミッション・ステートメントには3つ点が強調されている。第1点は、VRCPSでは子供と大人の誰でもが「学習と社会生活」で「成功」を体験する、ということである。ただし、ここで言う「成功」とは「各人がそれぞれの目的・目標に向かって努力し、成果をあげること」、一般的な言葉で表現すれば、「各人は各人の社会的な位置を確認しつつ社会的貢献を果たしていく」ことを意味する。要するに、この「成功」は個人の「立身出世」と関係がないのである。第2点は、学校でも社会でも、新規な事柄はもちろん学校でのすべての「学び」に果敢に「挑む」生活態度を確かなものにしていく努力を強調していることである。これには、「学び」を通じて自らを社会的存在に高めていく生活の規範を創りだし、その規範をコミュニティ全体に根づかせよう、との目標が示唆されている。第3点は、子供たち各人はニーズも関心も「一人ひとり異なる」存在であるから、その有する能力を発揮する仕方も度合もことなること、したがってまた、子供たちへの教育的、家庭的それに社会的な対応は画一的であってはならない、というものである。この3点を相互に関連づけて総合すると、VRCPSの「コミュニティの再生」のための教育・学びの実践的意義が明らかになるだろう。

## ヤング校長とのインタビューから

このようなミッション・ステートメントを掲げたVRCPSは、その目的・目標に向けて注がなければならない大きな努力を教職員スタッフに求める。ヘンドン地区における「コミュニティの再生」は少なくとも10年単位の、文字通りの「長期的なスパン」で計画され、展望されなければならないからである。それ故、スタッフは、児童・生徒に対する日々の教育的、コミュニティ的、社会的努力だけでなく、人間的に成長する道筋を展望できるよう、彼らの親や他の大人たちに対する教育的、コミュニティ的、社会的努力もまた求められるのである。ここでは画一的なルーチンワークは無用であるかもしれない。ヤング校長は、インタビューでこう語っている。「教職員スタッフは、教育的ニーズ、コミュニティ的ニーズそれに社会的ニーズに十分応じられるよう努力しています。例えば、保育に不安を覚える母親によって組織されている『母親と幼児の会』、保育園入園前の子をもつ親のグループ『踏み石の会』のために保育教室を開いています。」また「コミュニティのニーズに応える他の取り組みとして、成人教育クラス、ファミリー学習、女性保健グループ、金曜コーヒー・モーニング、コミュニティ・ディナー、ネイバーフッド保育を開催しており、また少年少女ジャズバンドや母親・乳児グループなどの支援を行なっています。」

このような取り組みは、「コミュニティの再生」は1世代あるいは2世代もの長期間をかけた取り組みであると同時に、それこそ休みのない日々の取り組みによって実現されるのだ、との認識が教職員スタッフのなかにあるからこそ、実直に実践されるのである。VRCPSが担う「コミュニティの再生」

の機能は、コミュニティ住民の教育のニーズを満たしながら、コミュニティにおける人びとの生活の規範を創りだし、根づかせていくところに向けて発揮されるのである。したがって、VRCPSは児童・生徒の「健康生活づくり」を教育的、コミュニティ的それに社会的な観点から重視している。

この「健康生活づくり」についてヤング校長はわれわれにこう説明してくれた。すなわち、「児童・生徒の健康生活づくり」は学校だけではたちまち限界にぶつかってしまう。というよりもむしろ、それは実は、各家庭の、したがってコミュニティのもっとも基本的な課題なのである。しかしながら、「『健康生活づくり』を各家庭で実行してください」と訴えるだけでは何もしないのと同じことになる。「『健康生活づくり』は学校でも家庭でもコミュニティでも実行しよう」と訴えることが肝要なのである。VRCPSの教職員スタッフのなかには「学校昼食指導アシスタント」(School Meals Supervisory Assistant : SMSA)の資格をもったスタッフが17人(専任スタッフ7人、兼任スタッフ10人)おり、児童・生徒の食物の好き嫌い、食傾向などの食習慣をチェックし、学校と家庭での食生活改善を指導している。それだけではない。児童・生徒の「健康生活づくり」は家庭生活全般においてなされなければその効果は半減し、結果的に、実を得られないことになる。「健康づくり」はコミュニティにおける各家庭の「生活規範づくり」でもあるのである。このことの認識が重要である。

そこで、VRCPSは、昼食の指導の他に、「朝食クラブ」・「放課後クラブ」・「宿題クラブ」・「学童保育」・「学校ユニフォーム」の教育指導を通じた各家庭における「生活規範

づくり」を実践している。例えば、「朝食クラブ」は「朝食を生活全体のなかにしっかり取り込んで習慣づけることを意図した実践である。ヘンドン地区のコミュニティの家庭には児童・生徒が毎朝食事する習慣のない家庭があり、そのような家庭の児童・生徒は概ね毎朝食事をする児童・生徒よりも身体的に劣っており、語彙がすくなく、成績も良くないのである。そこで学校は児童・生徒はもちろん親も学校で朝食をとれるようにしたのである。2003年のデータでは「朝食クラブ」を利用する児童・生徒は「毎日平均110人」、親は「毎日平均40人」である。そして2004年のデータは未整理であることから出ていないが、スタバート副校長によると「その数は子供・親とも減少している」とのことなので、効果があった、と判断できよう。

また「宿題クラブ」も「生活規範づくり」に大きく寄与しているように思える。VRCPSのスタッフは「児童・生徒の親たちを学習過程のパートナーとみなしている」。この「学習過程のパートナー」という理念には「宿題は親たちと学校との積極的な関係づくりに寄与する」との考えが内包されている。もちろん、親と学校との関係づくりは「子供たちに大きな教育・学習的な利益がもたらされる」ことを意味するのであるが、同時にそれは家庭における「生活規範づくり」に連動していくのである。「定期的に出される宿題は、子供たちが家庭でも学習する雰囲気や親や他の大人たちがづくりだすことを意味する。そのための親や大人たちは、子供たちが自分の家のなかで宿題をやり終える静かな部屋を確保する、子供たちが注意深く宿題をやり終えるよう励ます、子供たちが宿題の提出期日を守るよう促す、とい

う手助けと励ましを惜しまないように親と大人たちに協力を求めているのである」。これはまさに、宿題を通じて親たちや大人たちに「生活の規範」を確立するよう求めていることである。

03年のわれわれとのインタビューで語ってくれたヤング校長の次の言葉には、VRCPSに寄せる彼女の哲学と愛情とが見事に示されている。それはわれわれを大いに鼓舞する言葉であった。彼女を取り巻くすべてのことがそれにははっきりと表現されているのである。

この地域の大人たちの間には教育に対して、あるいは学ぶことに対して、否定的な態度が見られます。そのような態度を解消することが私たちスタッフの第1の仕事です。この地域の親たちの多くは自らしっかりした教育を受ける機会をもてなかったのです。親自身もしっかりした教育を経験していないのです。学校は自分たちの「場所」ではない、他のプロフェッショナルな人たちが関わる「場所」であり、自分たちには無関係な存在だと思ってきたのです。したがって、とにかく親や他の大人たちが教育・学習に関わる、参加すること機会を私たちスタッフはつくっていかねければ、と考えています。子供と一緒に学校で朝食を摂ることから放課後クラブに関わることまで、親や他の大人たちが学校という環境と関わる「場」を積極的につくっていくことが、私たちの課題であり、ビジョンでもあるのです。



## スタッバート副校長とのインタビューから

ヤング校長のこの言葉に「コミュニティの再生」を一つの重要なミッションとしているVRCPSの歩むべき方向と将来展望とをわれわれははっきりと見てとることができるだろう。コミュニティ担当のスタッバート副校長が今回の訪問インタビューで語ってくれたことも、ほぼヤング校長のこのインタビューに沿っていた。スタッバート副校長は「コミュニティの再生」というVRCPSの課題と展望をわれわれに語った後で次のことを付け加えた。

VRCPSは、現在スポーツグラウンドの建設を計画通りに完成させるよう力を注いでいますが、その他に「環境教育の促進」と「チルドレン・センターの設置」および「ワン・ステップ・ショップの設置」を可及的速やかに実施する計画を進めています。「環境教育の促進」計画は、タイン・アンド・ウィア州のある地方銀行の寄付を得て実施するもので、校地の一角に日本庭園などいくつかの代表的な庭園を建設することも含めた自然環境教育と園芸教育を通じて、児童・生徒たちに自分たちのコミュニティの自然環境を保全し、各人の家と庭それにその周辺をきれいで清潔にしていく意識や生活態度を培うことを目的にしています。もちろん、排ガス、スモッグ、きれいな空気など自然環境についての科学的知識、園芸による植物・昆虫についての科学的知識の教育も実践します。

最近になって労働党政府も構想し始

めるようになった「チルドレン・センターの設置」計画は、現在年間51週行なっているチャイルド・ケアの「ネイバーフッド保育」を拡充させて365日休みなくチャイルド・ケアを実施すると同時に、コミュニティ住民のための医療やコミュニティの子供たちの「心理サポート」など地域医療を充実させていこうとするものです。

「ワン・ステップ・ショップ」(one-step shop) 計画は、「チルドレン・センター」計画と関連するのですが、ミルクその他赤ちゃんや児童に必要な品物や学校と家庭で児童・生徒に必要とされる品物をVRCPSで賄うことができるようにする計画です。これは、親同士の連帯・協力を創りだし、コミュニケーションを深めていくのに大いに役立つと私たちは考えています。

しかし、チルドレン・センターについては多少の懸念があります。それは、このセンターが機能してくると、(日本の教育委員会に相当する)教育局が介入してくる可能性があること、またNHS(国民医療制度)との関係も強化される可能性があることから、本校のチルドレン・センターの自主的な管理運営やマネジメントが制限される可能性がないわけではない、ということです。チャイルド・ケアやコミュニティの人たちと児童・生徒の健康・保健・医療の側面から「コミュニティの再生」を実現するべくミッションを追求していく私たちにとって、地方・中央政府による管理運営やマネジメントの制限は決して好ましいものではありません。

ところで、サンダーランド市当局は、

当初、「コミュニティの再生」を目指している本校のこのような「フル・サービス・サポート」(Full Service Support)―これはコミュニティの人びとがもっている家庭的、コミュニティ的ニーズを満たしていく本校のサービス活動の一環です―に反対していたのですが、中央政府が「チルドレン・センター」構想を打ち出すと態度を変えて、私たちのコンセプトを支持し始めました。また市当局と教育局はこのコンセプトを自らの功績に含めようとして相当な金額の補助金を出してきている。私たちとしては、何も市当局と対立することを善しとする訳ではありませんので、市当局が本校のミッションの意義と社会的位置づけについてしっかりした識見をもつよう願うだけです。

スタバート副校長は、VRCPSとコミュニティの結びつきをいかにして強めていくか、したがってまた、コミュニティ住民がさまざまな形態で本校に参加する契機をいかにして創りだしていくのか、要するに、ジェフ・ドッズ氏がVRCPSの「趣意書」のなかで強調していたように、VRCPSをいかにして「コミュニティのなかのコミュニティ」にしていくのか、そのために中央・地方の政府・行政はどのような支援を行うべきか、といったことをわれわれに語ってくれた。コミュニティ担当副校長のスタバート氏ならではのインタビュー内容であった。

## ジェフ・ドッズ氏という人物

われわれの研究会仲間は2002年、03年それに04年の3回にわたってSESやVRCPSなどを訪問・調査したのであるが、3回とも

われわれを案内し、課題や計画を説明し、その上パブやレストランにまで付きあってくれたのは主にジェフ・ドッズ氏である。しかも彼はパブやレストランではほとんどわれわれにご馳走してくれたのである。

2002年にSESを訪問・調査するために私が最初に手紙を宛てたのはジョン・ブラックバーン氏であり、われわれの訪問・調査を歓迎する旨の返事を私に下さったのもブラックバーン氏であったので、われわれはてっきりブラックバーン氏がホスト役を務めてくれるものと思っていた。だが、ヨークを出発してサンダーランドのホテルに到着したわれわれを出迎えてくれたのはジェフ・ドッズ氏であった。ドッズ氏はそれから今年の訪問・調査まで常にわれわれと行動を共にし、調査の際には非常に貴重な意見、コンセプトをわれわれに示し、明白な説明を加えてくれた。老練な指導者ブラックバーン氏と若くいかにも活動的な指導者ケビン・マークウィス氏ももちろんわれわれにSESのプロジェクトやプログラムについて熱心に説明してくれたのであるが、ドッズ氏は、その際に常に彼らの隣に居て、プロジェクトやプログラムの重要な事例、含意されているコンセプトを適切かつ分かり易くわれわれに教えてくれたのである。

われわれは間もなく気づくことになるが、VRCPSのプロジェクトやその具体的プログラムについてはドッズ氏がSESの指導者のなかでもっとも具体的に熟知しており、適切に説明することができたのである。それもそのはずである。彼はVRCPSの設立を手掛け、開校と同時に「管理運営責任者」(Chair of Governors)の重責を担っていたのである。SESの指導者の一人であるドッズ氏が「管理運営責任者」であることは、

VRCPSが「<sup>s s s s s s s s s s</sup>コミュニティ立小学校」であることを裏づけているのであるが、そのことはさておいて、ドッズ氏は管理運営責任者としてVRCPSの「趣意書」(2003年9月)に次のような「<sup>ステートメント</sup>声明」を記している。

本校の管理運営者のビジョンは、コミュニティの中心的存在、すなわち、コミュニティのなかのコミュニティとなるような学校を創ることである。私たち管理運営者は、コミュニティ全体のニーズを満たすサービスを提供し、実行するための施設、スタッフそれに資源を整え、用意することを本務とする。スタッフ、施設および資源がハイ・クウォリティであれば、利用者は最高可能な教育水準に到達することができるだろう。

私たちはまた、本校の施設は「いつでも開放されている」状態にあり、本校の管理運営は公開され、透明であり、直ちに対応し、前進していくものである、と確信している。要するに、本校は、子供に対しても大人に対しても、彼らのニーズが何であれ、彼らのもつ潜在能力を引き出し、高めるために、各人に応じた専門レベルで彼らに接して彼らの能力を発現させたいと願っているのである。

ドッズ氏が述べているように、VRCPSはスタッパート副校長の説明通り「コミュニティのなかのコミュニティ」となること、「コミュニティ全体のニーズを満たすサービスを提供すること、コミュニティの人びとの「潜在能力を引き出し、高め、発現させる」ことを推進しているのである。時と

して縦割り行政や制度それに地方政府や公的機関の「日和見主義」のバリアーに出遭っても、それらを乗り越えて前進していく力をVRCPSは保持している、とそうドッズ氏は訴えているのである。

ドッズ氏はまたなかなかユーモアのある好人物である。彼はわれわれに次のようなユーモア話をしてくれた。かつて彼はジンバブエ解放戦線をイギリス国内で支援し、1980年の独立の実現に寄与したのであるが、その後間もなくジンバブエの(イギリスからの)独立を祝ってジンバブエ政府の女性要人、つまり、かつての解放戦線の女性指導者たちをサンダーランド市役所に招待したときに、彼女たちに「市役所はいかがでしたか」と感想を聞いたところ、彼女たちは「バズーカ砲3発で崩れる」と答えたとか、また彼女たちが「この市役所では何人の人たちが働いていますか」と彼に訊ねたので、彼は「約半分の人たちが働いています」(つまり、後半分はサボっている)と答えたとか、われわれを大いに笑わせてくれた(これは本当にあった話だそうである)。

私は、ドッズ氏が昨年末に「脳溢血で倒れた」と聞いていたので、今年の訪問をどうしようかと躊躇していたところ、彼の方から「ほとんど回復したので遠慮せずに来て下さい。SESやVRCPSなどについての新しい情報をお知らせします」という誘いがあった。われわれは彼へのお見舞いを兼ねてサンダーランドを再び訪ねることにしたのである。

ドッズ氏は、サンダーランドの住宅協同組合で活動し、またサンダーランド市議会議員を務め、59歳の現在でもSESの指導者であると同時にVRCPSの管理運営責任者の重責を担っている。彼の長兄はサンダーラ

ンド市長(名誉市長)を務めたこともある著名な判事であり、サンダーランド市の中心部にある「植物園」のエントランスには(まだ現役で活躍しているのに)彼の功績を讃えて彼の名前が大きくはめ込まれている。しかし、われわれはドッズ氏自身の長い活動歴や思想については先に記した程度しか聞いたことはないし、まして彼の私生活についてはまったく知らない。それでも、われわれより一足先に、私の娘の亮子がSESとVRCPSを調査するために、ドッズ氏と奥さんのリンダの好意に甘えて今年の8月初旬にドッズ氏の家で10日間泊りしたが、その家は「大きな邸宅」で部屋数も多く、清潔で、また大変綺麗な手の行き届いた庭があった、と後で亮子が私に話してくれた。彼の家には日本や中国など比較的高価と思われる東洋の民芸品や芸術的な作品が相当数並べられているし、お二人とも趣味が多彩のようである、とも亮子は言っている。

最後に、SESがわれわれとの連帯のために気を使ってくれたことを記して、この訪問記を擱くことにする。それは、SESのホームページのCommunityの項目をクリックすると、2002年にわれわれがSESとVRCPSを訪問した際に撮影した写真が載っていることである。今考えてみると、SESと私との出会いは「SESのホームページ」を通してのことであるが、現在のホームページは以前のそれよりもずっと良く練られたものになっており、SESとそのスタッフの活躍振りが一目で分かるようになっている。そのスタッフのなかには未だお会いしたことのない若いスタッフが写真に載っていることから、若い新しい息吹がSESに注ぎ込まれているようである。そう言えば、ブラック

バーン氏の自慢の娘も、マサチューセッツ工科大学を卒業して、この夏からSESで活動を始めている。彼女はわれわれがVRCPSを訪問するのを知って、わざわざわれわれに会いに来てくれた。伶俐で、凛とした、美しい顔の青年である。ブラックバーン氏が自慢することだけある。彼女は日本語でわれわれに挨拶した。「ヨクイラッシャイマシタ。ケンキュウガンバッテクダサイ。」

SESのホームページ：<http://www.socialenterprise-sunderland.org.uk/index.htm>